

自由な生き方を許してくれる塾生たちに感謝

宮島 司 みやじま つかさ
法学部法律学科 教授

3年、4年（各学年20人から25人程度）が合同ゼミ形式で勉強し、またスポーツにも打ち込むことにより、少なくとも前後60人から70人は一生涯の仲間。

慶應義塾に残って三十数年、自分はいったいどのような姿でゼミに接してきたのだろうか？彼らに何かを残すことができたのだろうか？定年まであと2年数カ月となって、最近よく考えることである。いくつかの思うところや反省点はあるものの、もう今更取り戻せない。今までの自分を信じ、今までのやり方でいくしかない。幸い、彼ら全員がそれぞれの選択した道でしっかりと生き続けてくれていること、自分で言うのも少し妙ではあるが、おそらくほぼ全員がゼミを慕い続けてくれていることが、その確信を一層強くさせる。「今までのやり方」とは、「人としての宮島司」のありのままをさらけ出し、彼らとともに生きていくということである。ゼミ合宿のスポーツイベントや学部・塾のソフトボール大会では、年甲斐もなくスタメンを譲らない。少々ケガはいとわない。学生にどう映っているかは知らないけれど、何事にも真剣に取り組むことだけは心がけてきた。ゼミや授業の最中、分からなければ分

からないと吐露する。商法学の難しさは、この歳になっても、いや、なればなるほど私を苦しめる。新たな会社法や保険法の登場は、「商法学とはいったい何なのか」という根本問題さえ提起してくる。慶應義塾の商法の先生方から学んできたのは、謙虚にひたすら「そもそも」論を探究していくことであり、正直に学生に対面することである。ゼミ生に何かを課すということとはしなかつた。テーマさえ自ら考え出させることにより、その課題に責任をもって取り組む姿勢を植えつけるように心がけてきた。時としてかなり歯がゆいこともあった。そうした彼らが、半年経ち、1年経つうちに見違えるように立派になってくれた経験を感じ、じつと我慢するしかない。ただ、このようなのんきな生き方をし、それでも構わないのだと開き直って大学生活を送ることができるのは、きわめて優れた潜在能力をもった慶應義塾の学生が相手であったからとしか言いようがない。

真の文武両道を目指して

荒地竜資君 あらかちりゆうすけ 経済学部3年

宮島司研究会（会社法）は、今年度で33期目を迎えました。普段の発表や討論はもちろんのこと、合宿や先生のお誕生日会、OB・OG会など、多数の行事が積極的に開催されています。宮島先生が体育会の理事をされていることもあり、体育会の学生が多く、学業と同時に課外活動にも力を入れているゼミ生が大半を占めています。元気で活発な学生が集まっており、研究会の雰囲気は非常に明るいのとなっています。

歴史ある研究会だけに、縦の繋がりが強いことも特徴です。私のように、親子二代でお世話になるという例もあります。先輩方がつくり上げてこられた伝統を受け継ぎ、今後さらに良い研究会にしていくつもりです。



情報技術でデザインするサステイナブルな建築と都市

池田靖史

環境情報学部 教授

デザインは、抽象的な思考と具体的な葛藤の中間にあります。チームで取り組むプロジェクトの中でそれを学ぶことが研究会のモットーです。

私たちは、環境に融和する建築や都市を、情報技術を応用してデザインする方法について研究しています。建築や都市はいつの時代も社会の要請によって造られますが、現代の私たちの生活には、大規模な自然災害や資源エネルギー不足に対応できるサステイナブルな方法が、地球規模の視点で求められています。このことを実現させるために、建築や都市が自然環境と対立するのではなく、自然のシステムに融和することは、人類が古来求め続けてきた理想でもあります。情報技術の進歩が、こうした建築や都市のデザインにも新しい可能性をもたらすことが期待されており、その根幹となるのは空間環境を3次元にデジタルデータ化することです。

BI M（ビルディング・インフォメーション・モデル）と呼ばれる、デザイン情報のデジタルな伝達共有手段によって設計を思考し探索する方法に始まり、実際に造るための部品の生産・組み立て方法、さらには空間環境の利

用状態を制御する方法までをつなぐことで、そのプロセスにさまざまな革新的技術が生まれつつあります。例えば、光、熱、気流、音などの空間環境要因の予測シミュレーションを反映させ、空間形状や立体的関係に最適化するようにコンピュータで高速に計算（アルゴリズムック・デザイン）して生まれた形状を、デジタル制御の製造加工技術（デジタル・ファブリケーション）と連携させて実現可能にする方法があります。研究会の学生はこうしたデジタルデザインの最先端の技術を学びつつ、それを、環境融和を見据えた建築プロジェクト事例の検討と提案によって社会に応用する可能性を模索しています。塾内の他分野と連携してエコハウスを実験・実証するプロジェクトでは、その場の自然エネルギーだけで健康的かつ快適に生活できるような住宅を設計し、さらに実際の建設プロセスにも関わっています。このように、チームでものづくりをする実体験のなかで、互いに学び合っています。

チームで取り組むコンピューティショナルデザイン

わたなべ けい
渡邊 圭君 環境情報学部 4年

私たちの研究会では、コンピュータを用いて日射や風などの環境解析や、設計手法の一つであるパラメトリックモデリングをすることで、今までできなかったエコな建築をチームでデザインするプロセスについて研究しています。ある人は環境解析、またある人はCG制作といったように、研究会のメンバーそれぞれが得意な分野を持っています。一人ひとりがただ流れ作業のように担当をこなしていくのではなく、常にフィードバックし合いながら設計を進めていくところに新しいデザインの形があります。研究室には常に誰かが泊まり込み、ときにはバーベキューなどもしながら、先生、院生、学部生、他研究室的の学生が仲良く“生活”しています。

